

令和2年8月3日～8月9日までの全国の暑さ指数(WBGT)の観測状況 及び熱中症による救急搬送人員数と暑さ指数(WBGT)との関係について (令和2年度第14報)

1. 全国の暑さ指数(WBGT)の観測状況について

この期間の6都市(注1)の日最高暑さ指数(WBGT)の平均値は、「**嚴重警戒**」を示す28℃を超える状況が続きました。6都市の10年間平均値と比較すると、前半はやや高め、後半はやや低めで推移しました(図1、表1参照)。

11都市(注2)では、札幌を除き、28℃を超える日が多く、東京、名古屋、大阪、高知、福岡、鹿児島、那覇では「**危険**」を示す31℃を超える日がありました(表1、表2参照)。

全国を見ると、28℃を超える日が多く、東北地方以南では31℃以上となった地点も多数ありました。

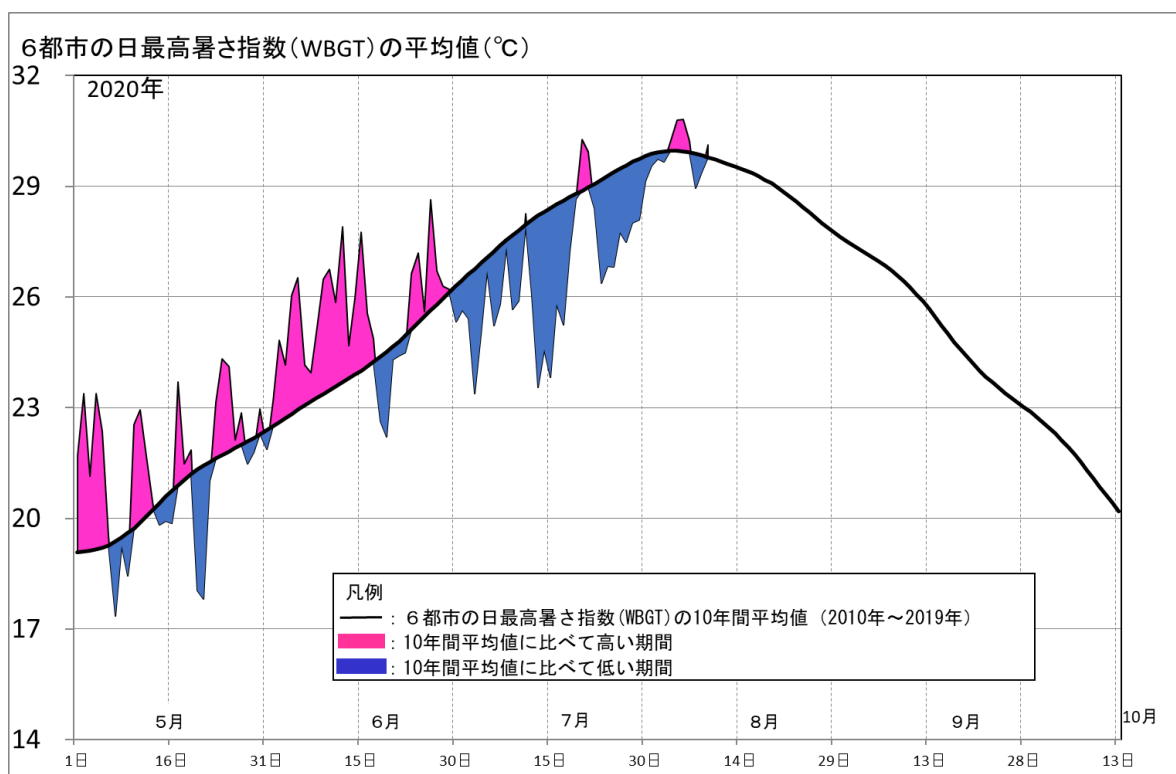


図1 全国の暑さ指数(WBGT)の動向と過去10年間平均値との比較

表1 全国11都市(注2)の日最高暑さ指数(WBGT 8月3日～8月9日)(注3)

日	札幌	仙台	新潟	東京	名古屋	大阪	広島	高知	福岡	鹿児島	那覇	6都市平均
3	24.6	27.6	29.6	29.5	31.3	30.8	28.9	31.1	31.0	30.6	31.4	30.2
4	27.0	29.7	29.7	31.9	32.3	30.0	28.9	29.9	31.9	31.5	32.0	30.8
5	27.1	30.8	29.9	32.5	31.5	30.1	29.0	30.6	31.9	31.2	31.8	30.8
6	23.7	30.7	30.4	31.5	30.9	29.3	29.5	31.0	29.8	31.5	33.1	30.2
7	23.8	27.2	25.5	31.9	30.0	30.0	28.2	31.3	28.1	30.9	31.8	29.0
8	21.6	23.0	24.2	31.6	30.7	30.8	27.7	30.8	31.4	32.6	30.4	29.4
9	23.6	25.7	27.0	32.5	31.2	31.4	28.8	30.6	29.8	31.3	28.4	30.1

(注1) 6都市：東京都、大阪市、名古屋市、新潟市、広島市、福岡市

(注2) 11都市：札幌市、仙台市、新潟市、東京都、名古屋市、大阪市、広島市、高知市、福岡市、鹿児島市、那覇市

(注3) 表1、表2の値は速報値であり、年末に発表される確定値とは異なる場合があります。

表2 全国11都市の8月3日～8月9日の暑さ指数(WBGT)超過時間数(注3)

超過時間数	札幌	仙台	新潟	東京	名古屋	大阪	広島	高知	福岡	鹿児島	那覇
31℃以上	0	0	0	19	6	1	0	4	10	10	22
28℃以上	0	23	26	59	57	50	21	63	50	77	70
25℃以上	12	57	65	126	133	149	107	153	148	158	167

2. 6都市の日最高暑さ指数(WBGT)と熱中症による救急搬送人員数(全国)との関係

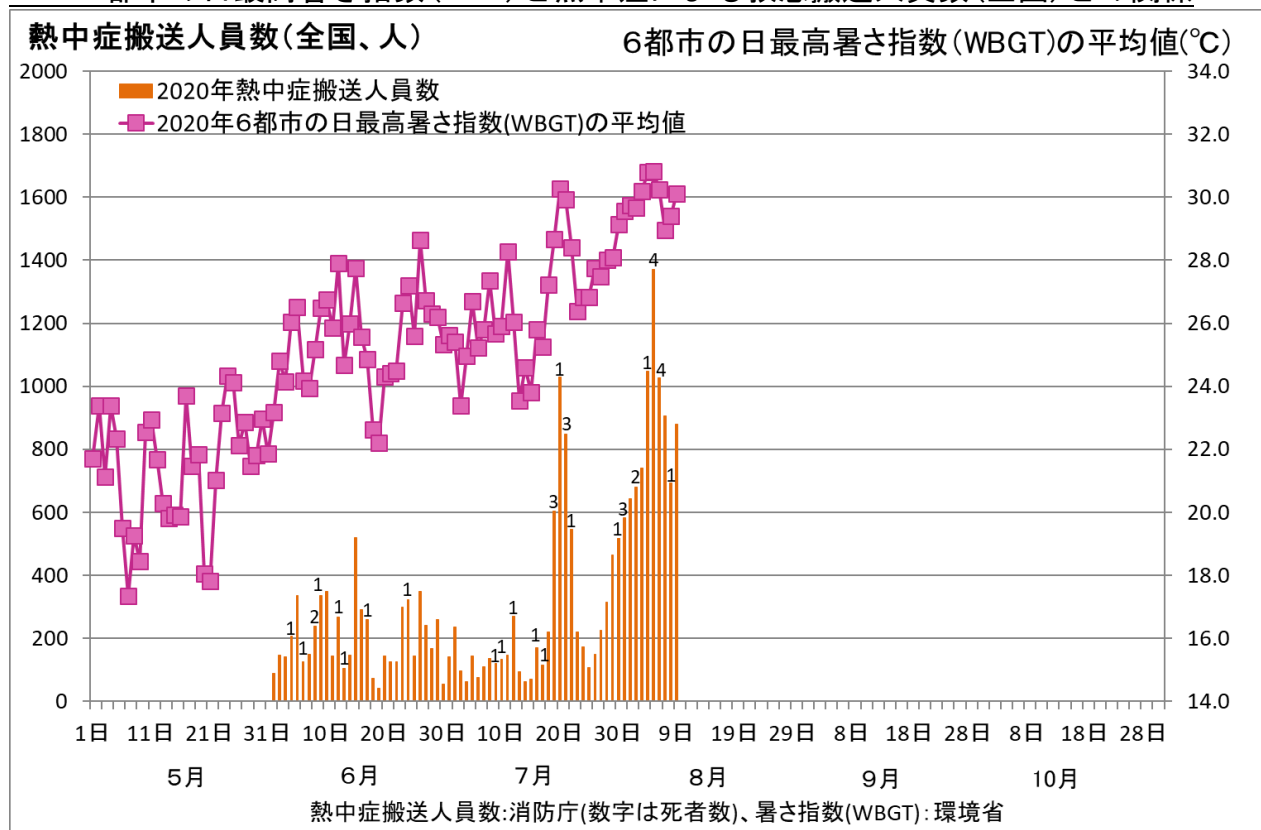


図2 6都市の日最高暑さ指数(WBGT)の平均値と熱中症搬送人員数の推移

○8月3日から8月9日までの6都市(注1)の日最高暑さ指数(WBGT)の平均値は、「厳重警戒」を示す28℃を超える状況が続きました(表1、図1)。消防庁発表の速報によると、熱中症による救急搬送人員数は、8月4日1,048人、5日1,371人、6日1,027人等、千人を超える日が続き、この期間の総数は6,664人(死者10名を含む)と非常に多くなりました(図2)。この数字は昨年同時期と比較すると半分以下です。この期間の暑さ指数が昨年より低めではありますが、新型コロナウイルス感染症対策による活動自粛も影響しているかと思われます。

3. 今後の見通しと注意点

○8月14日までは、全国的に「厳重警戒」を示す28℃以上となる地点が多数あり、東北地方以南では「危険」を示す31℃以上となる地点もある見込みです。

気象庁の週間天気予報(8月12日発表、予報期間:8月13日～8月12日)によれば、「最高気温と最低気温はともに、全国的に平年並か平年より高く、平年よりかなり高い所もある見込みです。気温の高い状態が続くため、北日本から西日本では熱中症など健康管理に注意してください。」となっております。

- 令和2年7月豪雨によって被災された皆さまに対し、心からお見舞い申し上げます。
猛暑の中で未だに避難所での生活を余儀なくされている被災住民の方々、被災した住宅、施設、道路等の片付け・整備等の作業をされている方々、ボランティア等の方々が熱中症にかかる危険性がさらに高まりますので警戒が必要です。また、今年は、新型コロナウイルス感染症の予防対策も求められており、十分な感染症予防を行いながら、熱中症予防を実施していただく必要があります。
- 暦の上では立秋を迎えましたが、この時期は暑さが厳しく、各地で毎日のように熱中症警戒アラート（試行）や、高温注意情報が発令されています。熱中症は死に至る可能性のある病気ですが、予防法を実践することで、防ぐことができます。こまめな水分補給、十分な睡眠や休養、風通しのよい衣服の着用、屋外では日傘や帽子を活用するなどの備えを万全にして、熱中症に厳重に警戒をして下さい。

参考：【令和2年度の熱中症予防行動】

熱中症予防×コロナ感染防止で「新しい生活様式」を健康に！（リーフレット：3色）

https://www.wbgt.env.go.jp/pdf/20200621_orange.pdf （オレンジ）

https://www.wbgt.env.go.jp/pdf/20200621_blue.pdf （青）

https://www.wbgt.env.go.jp/pdf/20200621_yellow.pdf （黄色）

「新しい生活様式」における熱中症予防行動のポイント（リーフレット）

https://www.wbgt.env.go.jp/pdf/20200526_leaflet.pdf

「新型コロナウイルスを想定した『新しい生活様式』」における熱中症予防（留意点）

https://www.wbgt.env.go.jp/pdf/20200526_doc.pdf

暑さ指数(WBGT:Wet Bulb Globe Temperature)

暑さ指数(WBGT)とは？

暑さ指数(WBGT)とは、人間の熱バランスに影響の大きい

気温 **湿度** **輻射熱**

ふくしゃねつ

の3つを取り入れた暑さの厳しさを示す指標です。

軍隊での訓練の際に、熱中症を予防することを目的として、

1950年代にアメリカで提案されました。

熱ストレスの評価指標としてISO7243で国際的に規格化されています。

暑さ指数を用いた指針としては、(公財)日本スポーツ協会(元日本体育協会)による「熱中症予防運動指針」、日本生気象学会による「日常生活における熱中症予防指針」があります。



暑さ指数(WBGT)測定装置

暑さ指数(WBGT)の算出

$WBGT(屋外) = 0.7 \times \text{湿球温度} + 0.2 \times \text{黒球温度} + 0.1 \times \text{乾球温度}$

$WBGT(屋内) = 0.7 \times \text{湿球温度} + 0.3 \times \text{黒球温度}$



7
湿度の効果



2
輻射熱の効果



1
気温の効果

○乾球温度：通常の温度計が示す温度。いわゆる気温のこと。

○湿球温度：温度計の球部を湿らせたガーゼで覆い、常時湿らせた状態で測定する温度。湿球の表面では水分が蒸発し気化熱が奪われるため、湿球温度は下がる。空気が乾燥しているほど蒸発の程度は激しく、乾球温度との差が大きくなる。

○黒球温度：黒色に塗装された薄い銅板の球(中空、直径150mm、平均放射率0.95)の中心部の温度。周囲からの輻射熱の影響を示す。

※環境省熱中症予防情報サイトでは、暑さ指数の算出に気象庁の観測データを使用しています。

暑さ指数を用いた指針

● 運動に関する指針

気温 (参考)	暑さ指数 (WBGT)	熱中症予防運動指針	
35°C以上	31°C以上	運動は原則中止	特別の場合以外は運動を中止する。 特に子どもの場合には中止すべき。
31～35°C	28～31°C	厳重警戒 (激しい運動は中止)	熱中症の危険性が高いため、激しい運動や持久走など体温が上昇しやすい運動は避ける。 10～20分おきに休憩をとり水分・塩分の補給を行う。 暑さに弱い人※は運動を軽減または中止。
28～31°C	25～28°C	警戒 (積極的に休憩)	熱中症の危険が増すので、積極的に休憩をとり適宜、水分・塩分を補給する。 激しい運動では、30分おきくらいに休憩をとる。
24～28°C	21～25°C	注意 (積極的に水分補給)	熱中症による死亡事故が発生する可能性がある。 熱中症の兆候に注意するとともに、運動の合間に積極的に水分・塩分を補給する。
24°C未満	21°C未満	ほぼ安全 (適宜水分補給)	通常は熱中症の危険は小さいが、適宜水分・塩分の補給は必要である。 市民マラソンなどではこの条件でも熱中症が発生するので注意。

※暑さに弱い人：体力の低い人、肥満の人や暑さに慣れていない人など
(公財) 日本スポーツ協会「スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック」(2019)より

● 日常生活に関する指針

温度基準 (WBGT)	注意すべき 生活活動の目安	注意事項
危険 (31°C以上)	すべての生活活動でおこる危険性	高齢者においては安静状態でも発生する危険性が大きい。 外出はなるべく避け、涼しい室内に移動する。
厳重警戒 (28～31°C※)		外出時は炎天下を避け、室内では室温の上昇に注意する。
警戒 (25～28°C※)	中等度以上の生活活動でおこる危険性	運動や激しい作業をする際は定期的に十分に休憩を取り入れる。
注意 (25°C未満)	強い生活活動でおこる危険性	一般に危険性は少ないが激しい運動や重労働時には発生する危険性がある。

※(28～31°C)及び(25～28°C)については、それぞれ28°C以上31°C未満、25°C以上28°C未満を示します。
日本気象学会「日常生活における熱中症予防指針Ver.3」(2013)より